

八雲・木彫り熊の 博物誌

アップデート重ねた100年



八雲町の木彫り熊が盛り上がっている。

八雲町木彫り熊資料館では、年間来館者数が10年前と比べて3倍以上に増え、

町を歩けば、食堂やケーキ屋さんで歴代著名作家の木彫り熊が迎えてくれる。

その始まりは、大正時代、尾張徳川家当主の徳川義親が、農民の副業として制作を勧めたことだった。

八雲町で最初の木彫り熊が誕生して今年で100年。

アップデートを重ねる木彫り熊の魅力を探った。



約900点の木彫り熊を所蔵し、館内には約200点が展示されている。●八雲町木彫り熊資料館／八雲町末広町154 ☎0137・63・3131(教育委員会)。9:00～16:30。月曜・祝日・年末年始休館、入館無料。八雲町郷土資料館併設。

八雲町の名は「八雲立つ 出雲八重垣妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」(須佐之男命)※という日本最初の和歌から、尾張徳川家第十七代当主の徳川慶勝が命名した。

八雲町木彫り熊資料館を訪れると、「熊をくわえて歩く」という木彫り熊の既成概念が、見事に覆される。バットを振る熊、スキーで直滑降する熊、もっこを背負う熊、授業を聞く熊……。彫り方も、毛並みを細かく彫ったもの、面だけで大胆に表現するものと、バリエーション豊かだ。八雲の熊たちは、いかに生まれたのか。答えは、この地の歴史の中にある。

農民を豊かに

(写真上・左)十倉金之の「這(は)い熊(ぐま)」。八雲農民美術研究会で昭和初期に教材となった。(写真上・右)八雲町公民館木彫熊講座1期生で、2代目講師でもあった上村信光の「直滑降」。ともに八雲町木彫り熊資料館所蔵
(※)意味は「八雲立つ出雲の国を幾重にも取りまわしている雲のように、かわいいうる妻を籠らせるため、家の周りに幾重にも囲いを作るよ」。その八重の囲いよ」。祝婚歌。

文＝北室 かず子
写真＝田淵立幸



スイス製の「熊の学校」。個人蔵。八雲町木彫り熊資料館に展示。

なぜ徳川の殿様が名付け親なのか。慶勝は、廃藩置県で職を失った旧尾張藩士のために、八雲で徳川家の資本による開墾を決意。最初の移住者として、一八七八年（明治十二）、名古屋から十五世帯と単身者十人がやって来た。八雲町木彫り熊資料館学芸員の大谷茂之さんいわく「先住民アイヌの住んでいるところ、江戸時代から和人が漁業を営んでいるところを避けて、内陸部に移住しました。開拓使から百五十万坪の土地を無償で付与され、道路など生活に必要なインフラ整備を尾張徳川家が担いました。八雲開墾は、富国強兵、欧州列強に追いつき追い越せという国の方針に合致することだとも考え、自ら進んで資本を投入したのです」。西洋農具を導入して畑作に取り組み、八雲は繁栄期を迎える。

しかし、第一次世界大戦が終結してヨーロッパの農業が再興し、澱粉生産が復活すると、輸出していた澱粉が売れなくなり、沈滞。そんな八雲に木彫り熊を持ち込んだのが、第十九代当主の徳川義親だ。義親は、十カ月間、ヨーロッパ

を旅行し、スイスで木彫り熊に出会ったのだ。それは農民が副業で彫ったペザントアート（peasant art＝農民美術）の一つだった。義親は、ペザントアートが収入と心の豊かさの両方をもたらすことを知る。帰国後、八雲の農民にスイスで購入した木彫り熊を見本に制作を勧めた。一九二四年（大正十三）三月二十六日、農村美術工芸品評会が開かれ、第一号の木彫り熊が出品された。作者は伊藤政雄。一九二八年（昭和三）には八雲農民美術研究会が結成され、切磋琢磨しながら制作に励んだ。擬人化は、この時点で既に三十種類ものパターンが登場している。「八雲熊彫」を商標登録するブランド化も行った。

大谷さんはこう語る。「八雲には制作年代が確定した一番古い木彫り熊があり、当時の記録も残っていること、八雲の熊が北海道を代表する土産品として広く認識されていた経緯、ひいては木彫り熊というカテゴリーを形成したことも含めて発祥と言っています。木彫り熊についてはさまざまな見解が存在し、他の地域の方が早いと



八雲農民美術研究会の「熊の学校」。個人蔵。八雲町木彫り熊資料館に展示。



徳川義親(1886～1976)。東京帝国大学文科大学史学科と同理科大学植物科の両方で学んだ文理両面の知見の持ち主でもあった。

いう意見もありますが、木から熊の形だけを彫り出した木彫り熊が彫られ続けてきた事実は見当らないのです」。

ところで、義親とはどんな人物なのだろう。開墾が一段落すると、当初の契約に基づき、土地と家屋を移住者に無償で譲渡し、残りを徳川農場とした。欧州旅行の際、デンマークで酪農が豊かな農村を築いていることに気づくと、八雲に畜牛組合を組織し、酪農への転換を導いた。アイヌの生活改善に尽くす宣教師のジョン・バチラーの社会事業にも支援した。バチラーが『アイヌ・英・和辞典』を編纂する資金を提供したのは義親だ。ほぼ毎年春、八雲でアイヌと共に熊狩りを行い冬眠中の生熊を究明し、動物学雑誌に論文を投稿したり、生け捕りにした子熊に名前をつけて徳川農場で飼育したりした。



徳川農場で行われた木彫り熊の制作。昭和初期。八雲農民美術研究会で作られた木彫り熊は徳川農場が買い取り販路開拓もした。徳川義親写真および上写真所蔵＝八雲町木彫り熊資料館



「北海道第1号の木彫り熊」として、スイス製の熊と共に八雲町木彫り熊資料館に展示されている伊藤政雄の作品。町指定文化財。個人蔵



義親がスイスのベルンで購入した木彫り熊。ベルンは熊の意味で、熊の工芸品で栄えていた。町指定文化財。個人蔵

アイヌの熊送りの儀式にも参加した。わが国の文化史上、燦然と輝く功績は、尾張徳川家の史料や美術品が散逸するのを防ぐために財団法人の所有とし、公開の場として徳川美術館を設立したことだろう。所蔵する国宝『源氏物語絵巻』の保存にも信念を貫いた。

アイヌ文化と日本文化への敬意、類いまれな実行力。「貴族院議員でもあったので、八雲の取り組みを全国に波及させたい思いも抱いていたのでは」と大谷さんは言う。

個性輝く作家たち

歴代の作家をみてみよう。伊藤政雄の本業は酪農家。最初は彫刻刀を手でできず、傘の骨を研いで毛立（毛の流れを表現する技法）に用いたという。

十倉金之は東京美術学校を出て、日本画の巨匠・川合玉堂に師事した経歴を持ち、日本画の手法を取り入れるとともに、肩から四方に毛が流れる様子を表現する菊型毛を考



↑ 柴崎重行「這い熊」

案した。茂木多喜治は昭和天皇への作品献上を機に専業に。戦争中も創作を続けたことで非国民の誹りを受けながらも彫刻刀を離さなかった。柴崎重行は、面だけで構成するモダンな面彫りの中でも手斧で木を割ったままの趣を大事にし、ハツリ彫りと呼ばれる独自の作風を確立した。加藤貞夫の毛立は最も繊細とされ、二〇一〇年の上海万博に展示された。上村信光は公民館木彫熊講座の第一期生。泣き虫熊や逆立ち熊など、見る者をほっこりさせてくれる。引間二郎は太く短い毛彫りとカット彫りという面彫りの熊を生み出した。



↑ 上村信光「這い熊」
P.9に図解



↑ 茂木多喜治「這い熊」



← 引間二郎「這い熊」



↑ 加藤貞夫「熊の家族」

一九七一年（昭和四十六）に、茂木を初代講師として始まった八雲町公民館の木彫り熊講座は、十年の中断を経て、令和の今も続いている[※]。二代目講師となった上村が制作したガリ版刷りのテキスト「八雲木彫熊の作り方」を見ると、毛立だけでも多彩な技法があること、それらを共有できるように、誰にでもわかりやすく体系的に整理されていることに驚く。八雲町では多くの人々が木彫り熊作りに親しみ、伝統を継承してきたのだ。

第三次ブーム到来

大谷さんによると北海道の木彫り熊は今、第三次ブームを迎えているそうだ。「戦前、八雲や旭川で木彫り熊の制作が広がった第一次ブームに続き、第二次ブームは昭和三十年代からの北海道観光ブームと重なります。土産品として鮭をくわえた木彫り熊に爆発的な人気が出ました。昭和末期になると、その人氣に陰りが出たのですが、二〇二年（平成二十四）に郷土資料館に隣接する林業研修センター

「八雲熊彫」の特徴

【ガラス製の眼】

スイス製の熊の眼はガラス製だが、伊藤政雄の「北海道第1号の木彫り熊」のみ証釘が使われた。後に、剥製用のガラス製の眼を東京から取り寄せて使うとともに、まち針の玉がガラス製であることに着目して採用したことから、道内各地にまち針の玉を使うことが広がった。

【菊型毛】

すべての八雲熊にあてはまるわけではないが、肩甲骨の間に菊型のつむじがあるのが八雲熊の特徴。十倉金之が日本画の手法を取り入れた彫り方。ちなみに実物の熊にこのような毛並みはない。

【脚の毛が「ハの字」】

日本画の手法を取り入れて、脚の毛の流れを「ハの字」で表現する。十倉金之が考案した。実物の熊の毛の流れとは異なる。

【前足が内股】

実物の熊は、前足が内股、後ろ足が外股である。それに倣って、八雲熊の多くは前足が内股になっている。

【足裏に焼き印と号】

八雲農民美術研究会は「八雲熊彫」のブランド化のため、出荷される熊の足裏に焼き印を押した。当初は熊の顔の輪郭に「やくも」の文字を入れた焼き印だったが、1932年（昭和7）に熊の横顔の図案で登録商標を取得し、両方を使用した。他に作者の号（サイン）を彫ることもあった。

（八雲町木彫り熊資料館の展示より）

に木彫り熊展示室を設けたところ好評だったことから、二〇一四年にセンターを木彫り熊資料館に転用し、展示面積を倍にしました。転用前は年間約千八百人だった来館者が今は約六千人を超えています。道内の店舗などでも、また木彫り

熊が売れるようになったそうで、第三次ブームです。当館の来館者は約八割が町外からで、北海道の方々が、改めて木彫り熊を知ろうとされていることをひしひしと感じます。第一次、第二次と決定的に違うのは、お土産品というより

自分のために求める人が多いこと。このポーズが好きとか、この作家の作品が欲しいとか。木彫り熊を見られる町内の喫茶店や商店へ、若い女性がわざわざ訪ねてくる。名古屋市中開かれた展示会の図録『熊彫〜義親さんと木彫りの熊』や、編集者が調べてまとめた『熊彫図鑑』は、デザインやアートに敏感な人が注目し、版を重ねています。ファッションブランドの『ビームス ジャパン』と当館が共同で、Tシャツやキャップ、グラス、ネクタイなど木彫り熊のデザイングッズも開発しました。木彫り熊に対する解像度が高くなっているのを感じますね。木彫り熊は、時代に合わせてアップデートしているのだ。誰も



大谷さんは名古屋大学大学院修士課程を修了後、2012年八雲町郷土資料館学芸員に採用。木彫り熊資料館には開館準備から携わる。着ているのはビームスジャパンと資料館で共同開発したTシャツ。

が知る著名アーティストも、木彫りが熊への愛着を次々に発信している。「木彫り熊は八雲町のヘリテージ」という考えから、木彫り熊と本の店「kodamado」を開いたのが青沼千鶴さんだ。ナチュラルでモダンなインテリアの店内で、現役作家の作品やオリジナルグッズなどを購入できる。大谷さんが言う「自分のために求める」という第三次ブームのムーブメントを象徴す



(右)司法書士、行政書士として「やまびこ事務所」を運営しながら「kodamado」(八雲町本町87 ふたばビル2階)を開いた青沼さん、(中央)「熊彫はイメージ通りにいかないからこそおもしろい」と語る大原紋子さん、(左)「彫り出す感覚にときめく」という竹ヶ原幸子さん。大原さんと竹ヶ原さんは木彫り熊講座で熊彫を習っている。3人の他、熊彫り歴5年の田中由希子さんも共にkodamadoを切り盛りしている。



<https://kodamado.com>からダウンロードできる「御朱熊印(ごしゅくまいん)マップ」(デザイン/データウイイチ)には木彫り熊に会える店舗がまとめられている。八雲駅から徒歩圏内の店が多い。各店で買い物をしてスタンプを押し、スタンプを3つ集めると、3つ目の店で特典を受けられる。



八雲駅前にある「まるみ食堂」(八雲町本町125)。著名作家の作品群が、入り口のガラスケースの中にずらりと鎮座し、活気に満ちた厨房の前にも熊が並んでいる。



店主の大叔父である加藤貞夫氏の作品が店を見守る「クレールいとう」(八雲町本町234-4)は、70年以上続く町のお菓子屋さん。「アニマルケーキ」になった熊はやさしい味。



木彫り熊作家・小熊秀雄(こぐまひでお)さんの「熊友工房」(八雲町富士見町56)。取材時、遠来の若い女性が、小熊さんに直接指導されながら熊彫りの体験をしていた。



「くら屋菓子舗」(八雲町東雲町64-1)は、柴崎重行氏の「帽子熊」を焼き印したどら焼きや、木彫り熊誕生100年記念で熊の好物の蜂蜜やクルミを入れた「北海道木彫り熊モナカ」が人気。



八雲町の名産品、日常品が揃う「コアラのお店」(八雲町本町148-2)。車両関係の(有)ボデーショップ八雲の経営で、稼働中の洗濯機の下に熊がいるシュールな光景も魅力。

るようなお店だ。「木彫り熊を目当てに人が来てくださるようになって、木彫り熊で有名な町だと胸を張って言えるようになりました。自分の町を誇りに思うシビックプライドを大事にしたい」と青沼さん。ユニークな企画を連発し、誕生百年の今年は、十月まで「クマまつりファイナル」と題してさまざまなイベントや「kodamado」のギャラリーで月替わりの展示を行っている。「八雲町木彫り熊資料館の他にもいろいろ巡って、町の人と交流していただけたら」という願いが込められたマップを手に「まるみ食堂」「クレールいとう」「熊友工房」「くら屋菓子舗」「コアラのお店」へ行ってみた。そこでは歴代作家の作品があるものは威厳たつぷりに鎮座し、あるものは喧噪に溶け込んで、たしかに今を生きていた。歴史を背負いながらアップデートを続ける八雲の木彫り熊。絹雲(けんう)たなびく八雲の秋空の下、熊たちを訪ねてみてはいか